

大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏名	村山 敬三
学位	博士（中国学）
学位記番号	甲第143号
学位授与年月日	平成29年3月22日
審査研究科	文学研究科
論文題目	藍澤南城の学問と教育に関する研究
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授 門脇 廣文 (副査) 大東文化大学教授 中川 諭 (副査) 大東文化大学講師 小尾 孝夫 (副査) 筑波大学名誉教授 内山 知也

村山敬三博士論文審査報告書

2017年3月2日

博士論文提出者：文学研究科中国学専攻博士課程後期課程3年 村山敬三

論文題目：藍澤南城の学問と教育に関する研究

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1. 論文の要旨および特徴

村山氏のこの度の論考「藍澤南城の学問と教育に関する研究」は、幕末の越後の儒学者藍澤南城の総合的研究である。藍澤南城については、個別の問題についての論考が数点存在するものの、総合的な研究は未だ為されていない。したがって、本論考は藍澤南城についての初めての総合的研究だと言える。

江戸後期の折衷学者には、多くの書を著すことがほとんどないという傾向があるが、折衷学者の一人であるにもかかわらず南城には23点もの著述がある。ただ、公刊されたものは『南城三餘集抄』のみで、他は全て稿本⁽¹⁾であり、そのほとんどが、東京や大阪の図書館ではなく、新潟県の県立図書館に蔵されていたため、埋もれたままの状態であった。それらを掘り起こしたのが村山氏であり、本論考に添えられた別冊の資料である。村山氏は、これらの資料を丹念に読み解き、詳細に検討を加えて本論考を完成させた。

藍澤南城は地方の一学者に過ぎないため、研究対象として取り上げにくかったのは事実である。しかし、地方の庶民に対する儒者の影響という点から言えば、無視できない人物であることも確かである。したがって、そのような人物の学問と教育の実態を総体的に解明せんと試みた村山氏の今回の研究は、意欲に富んだものと評価することができよう。

本論考の構成は、序論で「南城研究の現状と課題及び研究方法」を述べ、第一章で「江戸期折衷派と南城の江戸遊学時代」について、第二章で「南城の経学」について、第三章で「南城の詩学」について、第四章で「南城の教育」について論ずるという構成になっており、最後に付録として「藍澤南城年譜」と「『三餘堂弟子籍』による地域・戸別弟子一覧表」の二点が附せられ、さらに別冊として先に述べた原典資料が添えられている。

これより以降、章ごとにその内容を紹介したい。

まず序章では、藍澤南城研究の課題と、それを解明するための方法が述べられている。これまでの先行研究には、渡邊秀英氏の「藍澤南城」・内山知也氏の「藍澤南城の詩経学」・藤川正数氏の「藍澤南城の荀子学」などがあるものの、村山氏は、これらの研究は藍澤南

(1) 手書きの本

城の著述の大半を見ないままなされており、そのため、それらの考察は十分には深められているとは言えず、南城の思想の中心をなす「折衷」という考え方の実態が十分には解明されていないと述べる。氏は、これらの課題を、南城自身の著述と彼の私塾である「三餘堂」関係の資料を検討することによって解明すると述べている。このような研究方法は正統で妥当なものであると言える。

第一章「江戸期折衷派と南城の江戸遊学時代」は、南城の思想形成を考える上で欠かすことのできない江戸後期の折衷学派の様相を、原念斎の『先哲叢談』や広瀬淡窓の「儒林評」、さらには佐藤文四郎氏や相良亨氏、丸山真男氏らの見解を参考にして概観したものである。その結果、村山氏は、江戸後期の折衷学派は「概して荻生徂徠への批判に力が注がれ、成徳育才を揚言して徳行を重視する傾向を示し、経書研究への情熱は薄かった」とまとめている。このような総括は概ね首肯できるものである。

このような状況に在って、十年ほど江戸に遊学した南城は、折衷学派の一人である片山兼山⁽²⁾の弟子である葛山葵岡に師事した。そして、葵岡が、兼山の説を忠実に祖述する人物であったため、南城が葵岡から学んだ学問も兼山のそれであり、兼山の「折衷学」が、南城の思想の根幹であったと述べる。ただ、村山氏は、「折衷」についての南城の考え方の特徴は、経書やその注に対してだけでなく、日常の全てに対する判断において「折衷」であるべきだと主張し、独自の「折衷」概念を展開させた点にあると指摘している。

旧来、「折衷」は「いいとこ取り」に過ぎないと考えられてきたが、南城の「折衷」は、村山氏が後の章で論を展開しているように、学問、詩作、教育において、きわめて重要な位置を占めており、決して「いいとこ取り」と呼んで済ませられるものではない。

第二章「南城の経学」は、『周易』『書経』『論語』『孟子』に関する南城の著述を取り上げ、詳細にその内容を分析し、各書の特徴を明らかにしている。

『周易』については、南城は『周易索隱』という書を著しているが、村山氏は、そこでは「象数学によって易の奥義を考える」という南城独自の易学が展開されていると述べ、「易象は変化する所に妙趣があるのであり、一象一義に固執してはならない」というのが南城易学の中心であったとする。

『書経』には『古文尚書解』があり、これは『古文尚書』の注解書である。南城は数ある注解書の中から、主として漢唐注疏学の『尚書正義』、宋学の『書集伝』、清朝考証学の『尚書後案』の三書を引用して注解を施している。

村山氏は、南城の注解態度は無批判に三書を引用するのではなく、経文自体の文脈に沿って内容を考え、諸説を検討して主体的に是々非々の判断を下し、自己の考えを明確に提示せんとする意志を働かせていると指摘する。

『論語』には、『論語私説』がある。村山氏は、『論語私説』における南城の『論語』学の特徴について、南城は、確かに注釈の一部は片山兼山の『論語一貫』の説を取り入れてはいるものの、「言葉」の解釈よりも「章」全体、あるいは「章」と「章」の繋がりを実証的に考証して、『論語』を考えるに際しては、古代の社会状況を把握する必要がある

(2)片山兼山：享保15(1730)～天明2(1782)。江戸時代中期の儒学者。名は世はん、通称は東造、字は叔瑟、兼山は号。延享3(1746)年江戸に出て、鵜殿士寧、服部南郭の門に入る。荻生徂徠の高弟宇佐見しん水の養子となるが、のち徂徠の説を疑い、漢、宋諸家の説をとり折衷学を開き、徂徠学を排撃した。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』

こと、孔子の弟子も一様でないため、彼等一人ひとりの学びの実際について考察を加える必要があること、方言を含めて言語使用の状況を検討する必要があることなどを提示し、『論語私説』は、訓詁よりも、文献学的な側面が強いものであると指摘している。

『孟子古注考』は、『孟子』の注解書である。氏は、この書は「古注考」と題されているものの、古注と新注の孰れが適切であるかを考証するものではなく、『孟子』とは何が書かれた書物なのかということについて、南城自身の見解を展開したもので、その内容から言えば「孟子考」と題した方が相応しいものであると述べている。

以上四種類の著述から認められる南城の経学思想は、経学に関する一定の論理に基づき、各書に注解を施すというものではなく、経書の経文を経書自体から考えようとする実証的態度から為されたもので、この点は四種の書に共通しており、それこそが南城が独自に展開した「折衷」の手法であったと述べる。

第三章「南城の詩学」は、公刊されている唯一の書である『南城三餘集』の中から適宜南城自身の漢詩を抽出し、それらに検討を加えたものである。

まず村山氏は、南城が、自身の著作『補漏』の中で取り上げた、杜甫の「茅屋爲秋風所破歌」を評して「単なる花鳥風月は後世に伝える価値が無く、世俗の平凡なことでも実録ならば後世に伝える価値を持つ」と述べていることから、南城の詩作は「実録」という手法によって作られているとする。

南城のこのような作詩法を、内山知也氏は「実況説」と定義し、「実録」と「実況」とを同義語と見ているが、村山氏は、南城の意識としては、「実録」と「実況」には微妙な差異があり、写実に徹した場合が「実録」であり、主たる部分は実録の手法によってなされているものの、それ以外の手法によってなされた部分を含むものは「実況」と呼ぶべきであるとする。その例として「緜女歎」を挙げている。

次いで、南城の作詩の半数以上を占める田園詩に着目し、その中から 17 首を抽出して分析を加えている。そして、それらは北国の風土の中で困窮する庶民の悲しみや苦しみを主題とするものではなく、農村の風土や風俗を、歴史の記録として描くことを主題としており、これらの作品も「実況」の手法で作られたものであると述べる。

南城は、学問の方法である「折衷」の概念を、作詩の方法にも応用しているが、それは、いろいろな詩風の良いところを取り入れて作るという「折衷」とは異なり、その時々題材について己の気持ちに最も適った表現を選ぶことであったと結論している。

第四章「南城の教育」は、まず南城の私塾であった三餘堂の入門者を分析し、遠隔地からの農民と僧侶の子弟が多かった点を挙げ、そこには光賢寺を起点とした真宗大谷派の寺院との繋がりが認められるとする。また当時の庄屋や寺院では、子弟をことさら遠い地域に出して教育を受けさせようとする気風が存在していたとも指摘する。

また、村山氏は、教育の場において南城は「尊農」を説いているが、それは『孟子』の思想をその理念としており、この理念の下で教育した農民の子弟は、普通の農民のそれではなく、各地で指導者たりうる豪農の子弟であり、南城が「尊農」を説くのは、豪農の子弟の教育を通して農村社会全体に安定をもたらす、その結果、農民全体を救済したいと考えたからであると結論づけている。

さらに南城は、子弟の教育においても「折衷」の重要性を説いたが、村山氏は、ここで言う「折衷」とは、学んだことに依拠して最も妥当な判断を下し、それを実践に生かすという考え方のことであつたと指摘している。

以上の四章の論証を通じて村山氏は、南城の唱える「折衷」とは、經書解釈においては実証的な態度による「適正」な判断を下すこと、作詩においては実況に基づいて「適切」な表現をすること、教育においては農村社会の現実に基づいた「妥当」な判断することを意味するものであり、このような独特の「折衷」論こそが、南城をして従来の折衷学派の学者とは異なった独自の存在にしていると結論している。

2. 本論考に対する評価

ここでは、村山氏のこのたびの論考について、文学研究科の「博士学位論文の評価基準」の項目に基づいて順次評価したい。

1. 課題設定の明確性

村山氏は序章において、研究の意義や必要性を的確に述べているが、それは、これまでの藍澤南城研究が、その一部分だけを取り上げて、その全体をとらえていなかったという明確な問題意識に基づいたものであつた。

2. 研究方法の妥当性

研究の目的も、「1」で述べたように、序章において明確に述べられているが、それに照らして、全体として、適切な研究方法を用いて分析がなされていると言える。

3. 先行研究・資料の取扱いの適切性

すでに述べたように、先行研究を正確に理解したうえで、本研究を当該分野の研究動向の中にしっかりと位置づけている。また、現在見ることのできる資料はすべて蒐集し、それら中の主要文献を精読したうえで論証に必要な文章を適宜引用しており、資料の取り扱いも適切であると判断される。

4. 論旨の明確性・一貫性

研究目的、分析、考察、結果の過程については、各章の構成においても、また、全体の構成においても、その論旨は明確で一貫しており、妥当な結論が論理的に導き出されている。

5. 構成・表現・表記法の適切性

第一章から第四章まで、学術論文として体系的に構成されており、各章の文章も、適切な表現・表記法によって記述されている。

6. 学術的・社会的な貢献

藍澤南城は幕末の越後の学者であるが、江戸時代は儒学が盛んだっただけでなく、その学問の水準も本場の中国にも劣らないほどのレベルに達していた。そのような時代に、江戸に上って学問を吸収し、地方に戻った学者が、その学問を基にして、地方で誰にどのような教育を施したかということについて明らかにしようとした本研究は、国際的な学術水準および学際的観点から見て十分な独創性や重要性があるだけでなく、地域に根差した研究が社会から要請されている現代にあつて、そのような要請にも十分に答えているものと言えらる。

ただ、本論考には、一部において、たとえば経書の位置づけや詩語の分析などにおいて、やや正確性に欠ける部分がないとは言えない。しかし、それは個別の問題を掘り下げるよりも、藍澤南城という一学者の全体像を描き出すことに主眼を置いているからで、そのことによって本論考の全体の価値を無にするような瑕疵ではない。この点は、著書として出版する際に修正することを要望しておきたい。

3. 結論

これまで江戸漢学史の中ではほとんど省みられることのなかった幕末の地方学者である藍澤南城を、正面から取り上げ、その全体像を描き出そうとした村山氏の今回の研究は、きわめて意欲的な試みであると言える。また、南城の経書解釈、作詩活動、教育事業などの分析を通して、「折衷」の概念が如何なる場においても貫徹しており、しかもそれが南城独自の「折衷」であり、それこそが南城の学問、作詩、教育に共通する根本的思想であったことを論証したことには、高い評価を与えることができる。さらに、「博士学位論文の評価基準」に照らしても、すべての点において基準をクリアしていると言える。したがって、本委員会は全員一致を以て、村山敬三氏の本論考は博士の学位を授与するに値するものであると結論する次第である。